

「歴史の扉」実践例

——5日前の入学式を思い出してみよう

藤本 和哉

歴 史総合が始まった。従来の科目から内容・方法とも様変わりし、先生方は試行錯誤なさっていると想像する。とくに初回の授業に向けては、力を入れて準備されたのではないだろうか。

筆者は昨年まで「歴史を学ぶ楽しさとは」「歴史を学ぶことは役に立つのか」などいくつかの話題を取り上げて導入単位としていた。だが新課程を迎えるにあたり、史資料がより一層重視されることや主体的な学びが求められることなどを意識して導入単元を刷新した。4時間構成としたその単元のうち、本稿では1時間目について紹介する。

授業展開

今年度の勤務校では土曜(4月9日)に入学式(図)をおこない、翌週前半はオリエンテーション、木曜(14日)から授業が始まった。この日、担当する3つのクラスで歴史総合があり、初回50分を使って以下の活動をおこなった。余計な先入観は排したかったので、どのクラスでも前置きや教員の自己紹介などは一切せず、すぐ活動に入った。

活動1 回想・記述(個人:10分)

上下に2つの枠を設けたA4判の紙を配布して「5日前の入学式を思い出し、上の枠内になるべく詳しく記述してみよう」と指示した。入学直後の緊張感もあり、どの生徒も真剣に書いていた。

活動2 比較(個人:3分)

書き終わったことを確認したあと、「記述したものを4人グループで回し読みしよう」と指示した。まずは各自で集中して読んでほしかったので「のちほど話し合う時間はとるから、ここでは感



図 勤務校の入学式の様子(筆者撮影)

想を口にせず、黙読すること」と付け加えた。

活動3 分析(個人:5分)

回し読みが終わったあと、「今から5分とるので、ここまでの活動の感想を頭のなかで整理してみよう」と指示した。いきなり話し合わせると弁が立つ生徒に影響されてしまいそうなので、各自が頭のなかを整理する時間をとったのだが、後半やや退屈そうな生徒もいたので、クラス状況によって時間を調整した方がよいだろう。

活動4 話し合い(グループ:7分)

つづいて「ここまでの活動を通してわかったこと、わからないこと、感想などをグループで話し合おう」と指示した。入学したばかりでおたがいよく知らない者どうしだが、わかりやすい共通の話題があるせいか、和気藹々と話していた。

活動5 共有(クラス:5分)

話し合いが落ち着いてきたところで「グループで話したことを紹介してください」と指示した。「記述内容が食い違っていた」と簡単にすますグル

ープもあれば、その原因を分析しているところもあり、深まりの度合いはそれぞれだったが、記述内容の齟齬に注目したのはどこも同じだったので、2～3つのグループの発表にとどめた。

活動6 話し合い(グループ:7分)

予定ではここまでで一区切りとし、個人の振り返りに移るつもりだったが、いまひとつ歴史とからんでいない印象だったので「ここまでの活動と歴史にはどのような関係があるのか、グループで話し合ってみよう」と指示した。話し合いが停滞しているグループがないか机間巡視したが、拙いなりに「資料／史料」「事実」「記憶」「主観／客観」などの言葉を用いて活発に話し合っていた。

活動7 共有(クラス:8分)

話し合いは続いていたが、終わりの時間も気になってきたので「グループで話し合ったことを紹介してください」と指示した。積極的にい出す生徒だけでなくこちらからも指名して、発言内容が重ならないように発表させた。

活動8 振り返り・記述(個人:5分)

最後に「今日の活動を通してわかったこと、わからないこと、感想などを下の枠内に書いてみよう」と指示した。5分では短かったようで、多くの生徒は後日提出した。

生徒の記述より

活動1の記述も多様で興味深いが、ここでは割愛し、活動8の記述をとりあげる。これらを読むと、生徒が学んだことや学んだつもりになっていること、誤解や疑問などがみえてくる。

【基本的なことへの気づき】

書く人によって中心に書く出来事や内容、視点が違うので、歴史の資料でも書き手によって内容が変わってくる。書き手の主観や心情が加わってくる。

→表現は様々だが、多くの生徒はまずこのことを

あげていた。

最初、入学式を思い出してくわしく書け、と言われたときは、歴史の授業と何の関係があるのだろうかと思っていたけれど、実際に記憶をたどって書いてみて、いま私は歴史の資料の作成と同じようなことをしているのだなと思った。

→書き手を経験することは、これからの授業で史料を扱う際に生かされると期待している。

人によってものの見方は違うということを、何回も、それこそ耳にタコができるほど聞いていたが、こんなにも違うものかと驚いた。

→高校1年生でも「人によってとらえ方が違うこと」は知っている。ただ、史料を残す側となり、さらに記述を比較検討する活動を通じて「違うこと」を体感できたのは意味があったのではないか。

【史料を読むことについて】

個人の感情がはっきり書かれていなくても、書かれている情報だけでその人がどんなところに関心があったのかわかるし、そのあたりが歴史にもつながっていると感じた。

→このように気づいていれば、今後の授業でも史料を文字通り読むだけでなく、文脈を意識して読み取れるのではないか。

私たちは、出来事→文への変換を行ったが、史料を読むときは、文→出来事への変換を行わなければならない。このときに重要なことは、読み比べるなどして多角的に見ることだと思った。

→変換という語は授業では出てこなかったが、書き手と読み手を介した史料とできごとの関係をうまく表している。

記録する側に非はないのだと思う。たとえ間違った内容を書いているようだが、偽造しようが、そ

うならざるを得ない、そうせざるを得ない背景というものが存在し、そこも資料の1つとなる。なので大切なのは、資料を読み解く側の姿勢なのだと思う。

→この記述についてはなるほどと思う一方、「せざるを得ない」との表現などが、過去のおこないをなんでも「仕方なかった」としてしまう思考停止状態にも読めて、やや危険性を感じている。

【事実とは／歴史とは】

歴史とこの活動を結びつけるとき、すでに過去のことを全て歴史と考えると、人によって過去にあった印象深い出来事はバラバラで、歴史も違ってくると思った。そういった中で、大昔の人たちが生きていた時代を統一してまとめられた教科書に沿って学んでいくと考えると、これはある1つの物語だと思い、興味深かった。

→教科書の成り立ちに関心を示す生徒も多くみられた。物語(story/narrative)についてはのちの授業で触れることになるだろう。

「歴史」というと教科書に書かれていることが正しく、正解は1つだという固いイメージを持ちがちでしたが、意外とあやふやなものだという考え方は新鮮でした。

→歴史をあやふやなものと言い切ってしまうのには抵抗感があるが、「正解は1つ」との認識は早い段階で一度崩しておくべきではないかと思う。

書く時間・人・立場・主観など様々なことによって事実は事実でなくなっていく。それを含めて楽しみ、考えるのが歴史なのか？ 私が今まで習ってきた歴史とは全然違う気がする。

→歴史に対してかなり固定的なイメージを持っていた生徒が多い印象である。

「過去のことを思い出してくわしく書く」ことが

「歴史」そのものである。今回の授業で、入学式を経験していない先生に伝える→歴史的営み。

→筆者は式的最中、会場の外にいた。このことを伝えたクラスの生徒は、全員の記述を読んだ私が式の様子をどのように受け取るのか非常に関心を持っていた。ほかに何を参照すればよいかアドバイスを求めると、式次第や写真、教員や保護者の証言などがあるとよいのでは、と話が広がった。

私たちはその入学式を体験しているので、誰の文章を読んでも理解できるし、納得できるが、何も知らない人たちがこれらのたくさんの記録をみても、微妙にちがって混乱するんだろうなあと思った。

→今回の記述のいくつかを来年の新入生に提示し、1年前の記録だと明かしたうえで「自分たちの入学式と何が違うか」と聞いたり、何かは明かさず「これは何の記録だろうか」と聞いたりしてみるのも面白そうである。

先生から「今日の活動と歴史の関係を……」という指示が出された時に、直感で「私の文章は歴史を記述するにあたっては最もよくない書き方をしている」と思った。私情やら余計な情報やらがふんだんに詰めこまれた書き方だったからだ。しかし他の班の意見や先生の話を聞いたとき、事実のみを詰めたものと私のようなものに優劣をつけることはできないし、互いに互いの良さがあるとわかったので、同じように歴史の資料などを画一化せず使えるものを使っていこうと思った。

→史料を無味乾燥なものと思っていた生徒がかなりいたようだ。庶民の日記より公人の日記の方が信用できるとか、公文書だから正しいとか、そういう思い込みが今回をきっかけにゆらげば、今後の授業で史料のイメージをとらえなおしていけると考えている。

人によっては自分の感想を、また人によってはただの事実の羅列。このように全て本当のことが書かれている中でも、人や時や場合によって内容は全く異なっているというのは、歴史の解釈の難しさをよく表していると思った。歴史なんてしょせんは伝言ゲームで、正確な事実がその通りに残るわけではない。

→何をもって「事実」としているのかなど突っ込みどころは多いが、このような記述に対して個々にはコメントしていない。今後の授業で取り上げるかもしれないし、それができなくても、本人が記述を振り返る機会を年度後半に設ける予定である。

「歴史は勝者が作る」という言葉を聞いたことがあるが、これが入学式ではなく戦争等の歴史的事件であったら、無意識だけでなく、意識的にも美化されたりすることがあるのではと思った。

→「意識的に」「無意識に」の違いは史料を扱っているとしばしば考えさせられることであり、この感想も今後の授業で引用する機会がありそうである。

今後に向けて

生徒の記述を読んで懸念があるとすれば、1つは「人それぞれ見方が違う」ことが強調されすぎていることだろうか。この印象が今回の活動で強く残り、もし理解がそこで止まってしまうと、人や立場による意見の違いをあきらめて受け入れるだけの悪しき相対主義におちいってしまうかもしれない。ただこの授業はあくまで高校での歴史学習の出発点であり、今後それを絶対視しないような学びができればよいと考えている。歴史総合の内容には論争的なものが多く、「人それぞれ見方が違う」ではすまされない場面にも出くわすだろう。どうすればその違いをこえたり、克服したり、総合したり、もちろんある時は受け入れたりできるかについて、具体的な事例で学ぶ機会を設けたい。

なお、導入単位では4コマ漫画の作成もおこなった。2つのテーマ(「日本の歴史」「自分の中学時代」)から1つを選んでつくり、次時にプロジェクタを使ってクラスで鑑賞会(作者名は明かさず)をおこなった。どこで区切るか、大量の事象や情報から何を選ぶか(捨てるか)など、これも歴史的な活動といえるのではないか。年度当初にこのような活動を取り入れることで、印象程度とはいえ生徒のレディネス(準備状態)をうかがえるし、記述や作品を年度後半に本人に振り返らせれば、みずからの見方や考え方が変容していることを実感できる機会も得られる。

おわりに

そもそも今回の授業は、今年度の導入として自分で新たに考えたものではない。以前に出席したとある会合の休み時間に川島真先生からうかがったアイデア(「行事について生徒に記述させ、各自の内容の食い違いなどから史料のあり方について考察する」)を授業化したものである。これまでいくつかの行事で試みたが、文化祭や体育祭だと記述したい内容が多すぎて活動1に時間がかかるし、その後の展開も大がかりになってしまった。今回取り上げた入学式は、生徒にとって面白みは少なく、けれど印象深いもので、絶妙な行事といえる。そして「歴史」「史料」「事実」といったことについて素朴に話し合うのに、生徒相互の先入観が少ない入学直後は最適な印象である。もちろん歴史総合の導入として史料について学ぶことは、このあとの授業で生かされてくるはずだ。実際、本稿を書いている6月末の段階でも、史料を読むなかで「そういう入学式について書いたとき……」というつぶやきが聞こえるときがある。

(ふじもと・かずや/筑波大学附属高等学校教諭)